

国文学における用語索引のありかた

A Study of Concordances of the Japanese Classical Literature

金子 豊

Yutaka Kaneko

Résumé

Concordances, or verbal indexes, of Japanese literature are not many in number and haven't been developed satisfactorily because of having lacked the custom of recording adequate quotations to include entry words. The author tried to clarify existing problems of preparing Japanese concordances, as well as to emphasize the importance of concordances for the study of individual literary works and of word usage. He also explained the principles to compile a Japanese concordance in the ideal form for its future development.

The author first clarified the notion of the word "concordance" according to various definitions, and then explained its structure based upon the characteristics found in the concordance compiled by J. Strong and that by J. Bartlett.

He pointed out that the lack of adequate Japanese concordances has caused it difficult to compile dictionaries to be used for etymological studies based upon basic source materials.

After differentiating the verbal index, or concordance, from the real index, the author listed 27 concordances of Japanese classics compiled after the Meiji Restoration (1868) with annotations and comments. Of these, structure and function of each were examined through analytic method and the general characteristics of Japanese concordance were listed accordingly.

The author finally tried to list the basic elements to be considered and grouped them into two categories, namely those related to human factor and those of format. As for the first; he discussed the attitude of compilers, the necessity of social recognition of the importance of concordances together that of the specific field developed in Japanese literary world. As for the second, he explained the necessity of selecting texts, of deciding the length of quotations, of arranging entries, of formalizing entries, etc. In concluding the article, the author mentioned his sincere wish for the furtherance of the study of this field together with ways and means of realizing it.

(Department of Mathematical Engineering and
Instrumentation Physics Library, University of Tokyo)

序

I. 定義と意義

A. 定義

B. 意義

II. 構成と特徴

A. 構成

B. 特徴

III. 問題点

結

序

近来、図書館学の分野における索引法は、自然科学関係のいちじるしい論文数の増加に加えて、カレントアウェアネスの要求にもこたえるために、machine methodによる作成の導入をみるようになって、いちだんと進展してきている。

英文学では、電子計算機による concordance の所産として、*A concordance to the poems of M. Arnold* (Cornell University Press, 1959) がすでに発表されており、引き続いて W.B. Yeats (1963), E. Dickinson (1964) と作られてきていて、今後の活躍が期待されるのである。

国文学では、ある作品についての索引とは、近世末期の村田了阿をはじめとして数多くその例がみられるが、英文学における concordance の概念と一致するものは、わずかに「万葉集総索引単語篇」(正宗敦夫編・白水社、昭和4)、「芭蕉七部集総索引」(山本唯一編・法蔵館、昭和32)、「竹取物語総索引」(山田忠雄編・武蔵野書院、昭和33)、「伊勢物語索引」伴久美編(「伊勢物語に就きての研究補遺篇、索引篇、図録篇」大津有一編 所収・有精堂、昭和36)だけのようである。このほかのものがどうして concordance でないかという点、concordance の構成上でもっともかんじんな見出し語をともなった用例を欠いているからで、これが共通して致命的な原因となっている。ここで国文学を対象を限定したのは、国語学はもとよりのこと、作品研究にとってもまず第一に基本的な用語索引の完備が望まれるはずなのに、最近はかなり広範囲にわたって整ってきてはいるものの、索引自体は用例を欠いていたり、索引形式が区々であり、また現状ではまだまだ数量的にも内容的にも作成された索引が十分ではないので、古文の中でも物語、日記の類の concordance

が確立されるならば、その形式が他の分野にも応用され、通用するものと解釈されるからである。

I. コンコーダンスの定義と意義

A. 定義

標題で用いた「用語索引」は、英語の concordance に対応する語であるが、筆者はこの場合、concordance の形態を国文学の索引にとりいれたものと解していることを、はじめに断っておきたい。

コンコーダンスという語は、*Vocabularium bibliothecarii*¹⁾ に、

concordance;	c. to the Bible
concordance [f];	c. á la Bible
konkordanz [f];	Bibelkonkordanz [f]
concordancia [f];	concordancias [f pl]
	de la Biblia
konkordantsiia [f]; k. k Biblii	

であると、英仏独西露の5ヶ国語の紹介とその使用例がみえている。また語の定義は、

Encyclopaedia of librarianship, The librarians' glossary, An introduction to librarianship, The reader's encyclopedia, The encyclopaedia Britannica, あるいは *A concordance to the poems of R.W. Emerson* (1932) の編者 G. S. Hubbell の著作 *Writing documented papers* (1946) などにみいだすことができる。ALA の定義は「バイブル、または一作家の作品における主要な語の索引で、テキストでの所在を示しており、普通それを含む文脈を示し、時には語の定義をくだしている」²⁾ となっている。これらを要約すると、コンコーダンスとは次の3要素を備えているものであることがわかる。

- (1) 見出し語がアルファベット順などにより、一定の順序のもとに配列されている。
- (2) 見出し語の引用個所を明らかにしている。
- (3) 見出し語をともなった原文中の用例を掲げている。

テキストに使用する J. Strong³⁾ と J. Bartlett⁴⁾ は、ともに Bible および Shakespeare の concordance の中で、もっとも代表的なものである。

[本文 1] The Books of the generation of Jesus Christ, the son of David, son of Abraham.

(マタイ、第1章第1節)

book M'tl:1 The b of the generation of
Jesus 976
generation M'tl:1 the book of the g of Jesus
Christ 1078
Jesus M'tl:1 book of the generation of
Jesus C 5547
son M'tl:1 of Jesus Christ, the s of
David, 5207
David M'tl:1 son of D, the son of
Abraham. 1138
son M'tl:1 of David, the s of Abraham
5207
Abraham M'tl:1 the son of David, the son of
A. 11

ここにおける“M'tl:1”は、Matthew 第1章第1節を指し、用例の文末の番号は、upright numerals (1, 2, 3, etc.) を旧約に用いてヘブライ語と、italic のもの (1, 2, 3, etc.) を新約に用いてギリシャ語と、それぞれ対比できるようになっていて、いずれも英語訳の完璧を期すための工夫にほかならない。こうした配慮は and, but, that, unto などの語まで、用例ではないが使われている個所を全部あげている。たとえば [本文 1] のものでは、“OF MATT1:14” “THE MATT1:14” となっていて、どちらもマタイ第1章第1節で4ヶ所に使用されていることがわかるのである。

[本文 2] Spread thy close curtain, love-performing
night. (ロミオとジュリエット 第3幕第2場 5行目)
Spread. Spread thy close curtain, love-perform-
ing night. iii 2 5
close curtain. Spread thy close curtain, love-
performing night. Rom. and Jul. iii 2 5
love-performing. Spread thy close curtain, love-
performing night, that runaways eyes may
wink. Rom. and Jul. iii 2 5
night. Spread thy close curtain, love-performing
night. Rom. and Jul. iii 2 5

上記 Spread の項で作品名が示されていないのは、その“Spread thy close curtain, ……”の前の行もロミオとジュリエットからの用例なので、以下に続くものでそれに属しているものは省略されているからである。なお、thy はオミットされている。

このコンコーダンスとはじめにふれた定義について、本邦で言及されているものを調べてみると、訳語の上で

は、a. 用語索引、b. 要語索引 c. 語句索引 d. 総索引 e. 索引 f. その他、に分けられる。以下のうちで訳語だけのものは、説明がみられなかったものである。

a-1. 図書中に使われた字句を索引したものを特に“concordance” (用語索引) と名付けている [天野敬太郎, 昭和22]⁶⁾

a-2. 用語索引。ある作家の全作品、又は重要作品の語彙を総合し、一定の順序に排列し、各々にその出所を示したものを用語索引という。英語のコンコーダンスに当り、初め聖書について作られたが、文学作品に及ぶようになった [天野敬太郎, 昭和32]⁶⁾

a-3. 用語索引, Concordance. 図書中の用語から検索できるように作成されたもので、聖書・古典について多く作られ、後の著作における引用から照会できることが主目的である [図書館ハンドブック, 1960]⁷⁾

a-4. 用語索引 (Concordance). 古典に現われた用語の索引で西欧ではバイブルのそれは最も普及している。わが国では近來、古典文学のよい索引が続々と刊行されている。万葉集・源氏物語は立派な索引が完成されている [西村捨也, 1958]⁸⁾

a-5. Concordance (用語索引)。ある作品または作家の全集における単語を (時には主題をも) 文脈をそえて、アルファベット順に並べたもの [福原麟太郎, 昭和35]⁹⁾

a-6. (n.) コンコーダンス, 用語索引, コンコーダンス, 照合表。ある文献に出てくる単語や章句のABC順のリストで、これら語句の本文中の出現個所の指示を伴うもの (普通は古典だけに用いられる) [ドキュメンテーション用語集, 1963]¹⁰⁾

b-1. 要語索引, Concordance. 特定の図書に記述された要語全部を、または少くとも重要と認められる諸項目をすべて摘出して、一定の体系、順序に従って、索引を作り、その要語が、本文のどこで取扱われているかを示したものをいう。聖書などについていうことも多く、また、その要語の前後に連絡する語を伴ってひけるようにしてあるものも多い [図書館用語辞典, 昭和26]¹¹⁾

b-2. 要語索引 (concordance). 詩や文章の一句をさがすための言葉自体の索引 [参考 図書の解題, 昭和30]¹²⁾

b-3. Concordance, 総索引・要語索引。有名な古典中の要語を抽出し、これをABC順に編成し索引用

としたもの。又聖書中の要語を集めたものを要語便覧と云う〔図書館大辞典, 1958〕¹³⁾

b-4. そもそも要語索引は索引語のもとに、これをふくむ本文を列挙して、その語句の所在を明示することをその特色とするもので、聖典や文学作品の如き含蓄ある著作にとっては必須のものとされている〔正法眼蔵要語索引上巻, 昭和37〕¹⁴⁾

b-5. 要語索引〔対訳書籍用語辞典, 昭和37〕¹⁵⁾

b-6. 要語索引 (concordance) 要語索引 (語句索引)〔情報管理便覧, 昭和38〕¹⁶⁾

c-1. 語句索引〔新約聖書語句索引 和一希 (*Japanese-Greek Concordance to the New Testament*) 昭和27〕¹⁷⁾

c-2. 驚嘆に価する多数の聖書本文引用 (レファレンス)、および交叉引照 (クロス・レファレンス) は、この書が今日の日本において他に追従を許さない最もすぐれた貴重な語句索引 (コンコルダンス) たりしめるものである〔聖書語句事典, 1955〕¹⁸⁾

c-3. 「聖書は聖書で」といわれているように、聖書の言葉全体に照し合わせることによって、聖書の理解は深められるのである。かかる意味においてコンコルダンス、即ち、聖書語句索引は、聖書研究の重要な基本参考書の役割を担っている。さらに、コンコルダンスのもう一つの大切な役割は、聖句を記憶してはいるが、その出典箇所が思い出せない場合に、これをたやすく指示することである〔聖書語句索引, 1957〕¹⁹⁾

c-4. 語句索引〔国訳新約聖書語句索引, 昭和33〕²⁰⁾

c-5. 要語索引 (concordance) 要語索引 (語句索引) b-6 をみよ。

d-1. ある作品、ある著作者の用語を残りなく集め、語ごとに出处、用例すなわち文脈を示して、整理配列した総索引 (語彙とも。concordance)〔国語学辞典, 昭和30〕²¹⁾

d-2. Concordance 総索引。要語索引 b-3 をみよ。

e-1. Concordance (索引)。書物の中の主要な語をアルファベット順に配列し、各語を含む章句と共に掲げた一種の辞書〔英語学辞典, 昭和15〕²²⁾

f-1. コンコルダンス。聖書語彙及びその索引をいふ。

尤も近來は凡ゆる種類の語彙を排列せるものを指す〔平凡社大辞典, 昭和28〕²³⁾

f-2. コンコルダンス, Concordance。聖句索引, 聖書索引書などと訳す。新旧約聖書のなかに記されている諸概念, 諸語について、それがどこに存在しているかをただちに見出しうるために作られた一種の索引である。聖書の研究家には欠くべからざるものとなっている。たとえば〈キリスト〉〈愛〉〈義とせられる〉などの各語の見出しを見ると、それらの語が、どの書物の何章何節に出ているかが、すぐわかるように、順序立てて並べてある。ヘブライ語, ギリシャ語, ヨーロッパ各国語, 日本語のものなどがある〔平凡社世界大百科事典, 1956〕²⁴⁾

f-3. Concordance, 聖書要語索引。

concordance to the Bible, 聖書要語索引。

要語索引 catchword index

用語集 glossary

索引 index

総索引 consolidated index, general index

〔学術用語集図書館学編, 昭和33〕²⁵⁾

f-4. 用語索引〔聖書・詩集などの〕〔最新コンサイス英和辞典, 昭和35〕²⁶⁾

f-5. (作家または(特に)聖書の) 用語索引〔*Kenkyusha's new English-Japanese dictionary*. 1960〕²⁷⁾

f-6. 用語索引〔新英和小辞典, 1965〕²⁸⁾

f-7. 用語索引 (作品・作家・聖書の)〔最新コンサイス独和辞典, 昭和38〕²⁹⁾

f-8. 要語索引〔*Kenkyusha's new dictionary of English collocations*. 1958〕³⁰⁾

f-9. 要目索引 (特に聖書の)〔コンサイス仏和辞典新版, 昭和33〕³¹⁾

本邦における訳語はこのように定着していないばかりでなく、与えられている定義まで様々であって、中でも第1表のように3要素そろって完全に言い表わしているというのは、山田忠雄氏、加藤宗厚氏の2人だけである。もっとも「英語学辞典」では、Dictionaryの項で類義語にふれて“Lexiconは特にギリシャ語などの‘辞書’について用ひられる。Vocabularyは語数の少い、説明の簡単な‘語彙’に限られ、glossaryは特定の語を説明した小辞典即ち‘用語解’をいふ。Indexは或る書物や作家に見出される主要語のアルファベット順の表で、各語の現はれる場所を示したもの。各語の下にそれを含んだ文句が文脈と共に挙げられる時、それは concordance

第1表 定義分類表

項 名 目 称	名称だ けのも の	コンコーダンス 3要素		3要素 の概念 に近い もの	3要素 を備え ている もの
		見出し語 引用箇所	用例		
a 用語索引		a ₁ a ₂ a ₃ a ₄ a ₅ a ₆			
b 要語索引	b ₅ b ₆	b ₁ b ₂ b ₃ b ₄	b ₄	b ₁	b ₄
c 語句索引	c ₁ c ₄ c ₅	c ₂ c ₃		c ₂	
d 総索引		d ₁ d ₂	d ₁		d ₁
e 索引		e ₁		e ₁	
f その他	f ₃ f ₄ f ₅ f ₆ f ₇ f ₈ f ₉	f ₁ f ₂			

注 1. 分類は定義の文面にしたがった。

注 2. 表記は a-1 を a₁ というようににした。

注 3. “3要素の概念に近いもの”は用例の扱いについてふれているが明確でないものをとった。

である³²⁾と述べていて、こちらの方が説明が行きとどいている。

このようにコンコーダンスについての定義の不十分さ、説明の足らなさと、序でふれた本邦でのコンコーダンスが少ないとは、定義において用例の欠如が目立っている点もふくめて、深い相関関係を持ち、注目される。国語国文学の領域ですでに定着したと思われる総索引という言葉は、命名、由来が不明であるが、そのはじまりは成書に対して用いられているものとしては「万葉集総索引」(昭和5)(全てに用例あり)と思われ、次が「徒然草総索引」(昭和30)(用例は助詞・助動詞のみにあり)で、さらに「更級日記総索引」(昭和31)(用例なし)へ続いている。総索引という呼称の意味は、国文学の作品を対象としたものは語を一字ももらさずにとっているということであろうし、用例をとらないものが多いのもその必要が認められないからというのかもしれないが、用例についてはないよりはある方がいいというようなものではなく、ぜひともなくてはならないものなのである。山本唯一氏は「芭蕉七部集総索引」の索引篇を“用語索引・作者別初句索引・肩書索引”に分けて、総索引という名のもとに用語索引を属させているようである。言葉における用語と要語、あるいは実物の総索引と用語索引の区別は、いずれも実際に使用されていることからして

甲乙はつけにくい。使用されている数の上では総索引という方が多くみられる。筆者が標題において“用語索引”をとったのは、コンコーダンスに対しては用語索引の方がイメージに合致すること、“総索引”は語感からすると用語の索引というより、書誌的・事項の索引にとられやすいこと(事実、次のような例がみられる。「有朋堂文庫 総索引総書解題」「図書館雑誌総索引」)、それに総索引と名のつく大部分のものが用例をとまなっていないことから、あたかも用例のないのが総索引だという誤解を生じやすいことなどの理由による。要語索引については、一つの規準を設けるならば、「正法眼蔵要語索引」はその制作の目的からして“要語索引”でいいとして、国文学関係のものは原文中の全ての語を索引にとらなければならないという原則からみて、索引的にまったく異質のものなので、この要語索引とは絶対に区別されなければならない。以上の点から、筆者は concordance の訳語に用語索引をあて、それは次の2点において完全にあてはまるものを指している。

- (1) コンコーダンスの3要素(見出し語、引用箇所、用例)を必ず備えていること。
- (2) 対象には国文学などの作品を扱い、語を一字ももらさずにとっていること。

B. 意義

用語索引の直接的な利用価値となると、具体的には“作品に密着して考えるからには、たとえば或る作品の用語を調べて特殊な語の特殊な使用法、もっとも多く使用されている語の傾向などを見きわめる方法なども、文芸性の解明にもっと役立たせていいのではないかとおもふ。それはいわば、表現を問題にして行く方法だから、対象とする作品の索引があれば便利である”³³⁾というような考え方に典型的に表現されていると思われる。この要求を満たしうるものとしての用語索引は、作品研究にとってテキストとともに、欠くことのできない基本図書そのものなのであって、そのような使い方による研究の成果に、“和泉式部日記”の語彙に関する一考察³⁴⁾がある。この、用語の研究という点については、それ自体独自の存在理由を持つと同時に、辞書編纂の際には基礎資料としての用を持つべきものという、いわば間接的な使われ方がみられるのである。³⁵⁾

このことに関しては「国語学」がさらに詳細にわたって、次のように指摘している。すなわち“将来の大辞書は確かに分業的に広く、深く、大規模な組織で編纂され

なければならないが、そこに至るまでの段階として、文献語に対しては各種の文献別に、綿密な索引が作られることが望ましい。すなわち、松井簡治が「大日本国語辞典」を編むにあたって用いた方法を、より広い対象に向けてより厳密に用いていくことが最も着実な方法として考えられるので、現在各種の文学作品に対して着々と索引作成が行なわれ、刊行されつつあることはまことに喜ぶべき現象であるといえる³⁸⁶⁾と述べている。ここであげられている「大日本国語辞典」の編纂方法というのは、その“修正版及び増補巻の刊行に就いて”と“凡例 2 語彙の蒐集につきて本書の取りたる方法”の 2ヶ所にみえている。³⁸⁷⁾ 要するに、選択された文献数百から語句の五十音索引を作り、それによって語釈の正確を期するとともに出典を掲げて孫引をさけたのであって、この辞書における語原、語釈ということについては、国文学成立の条件として、(一) 語彙の研究 (二) 文学史 (三) もらる・せんすの発見を指摘している折口信夫氏は、語原辞書には二通りの行き方があるとして、1. えちもろじいの辞書(語原の書いてあるもの) 2. えちもろじかるな辞書(語原的に書いて行くもの)を上げている。³⁸⁸⁾ そしてこの 2 の方の形態について、

唯今の所、ほんたうの意味の辞書がない。出来れば歴史的排列をしたものが必要である。でないと、一々の言語の位置が決らない。何時でも、江戸時代の語も室町時代のも、奈良朝の語も、同じに扱ってゐる。江戸時代の語の説明に奈良朝の語を持って来て積いてゐる。言語の時代錯倒が行はれてゐる。その為には歴史的に記述した態度が必要だ。が、さういふものが一つもない。これをするには、えちもろじかるな形を採らなくてはならぬことになる……ともかく、ことばの起源を辞書では書く必要が生じる。すると語源が要る。語原が一番最初のものを知らねばならぬと思ふのは、それは空想であると考へて頂きたい。

と述べ、³⁸⁹⁾ 語原研究の重要さと困難な点を強調されている。こうした国語辞書に対して英語辞書ではまさに正反対ともいえるほどの成果を上げているのであって、その作品は Oxford の *A new English dictionary on historical principles* に見られ、その方法は、あらゆる時期、あらゆる種類の文献が渉猟され、例文を重視し、歴史的証拠としての価値を標準にして選び、あくまで実証的に資料が蒐集されたのである。⁴⁰⁾ 辞書において歴史

主義を貫いて完成されたこの NED (または OED) が、ではどんなに便利かということは“語形、綴字、語法の変化から語義の変遷、推移まで実に整然と歴史的に示されている。たとえば、ある言葉のある新しい意味、用法がいつごろから生まれたかなども、ちゃんと典拠のある引用実例で示されているのだから、これほどはっきりして心強いものはない。日本語などでもこんな辞書さえできていればと、いつも大きなため息が出るばかりである”⁴¹⁾と紹介されている点を見ても分る。また大事なことは、国語が過去において使用され変遷してきた過程を歴史的事実として記録していることで、ここにおいて辞書編纂をはじめて社会科学になったともいえると説かれている。この辞典が出来上るまでには実に45年もかかっており、語の採集には世界中の英語学者に呼びかけ600万枚にも達するカードを整理・編集してできたこと知ることによんで、本邦ではいくら用語索引が充実完備していないとはいへ、「言海」の編纂過程などと比べると、個人の力だけではいかに無力に等しいかということを痛感させられるのである。⁴²⁾ こうした本邦での辞書編纂の立ち遅れにあたって、山田俊雄氏は旧来の国語辞典の欠陥として過去の国語の状態が正しく反映していないことをみた後に、まず既製の辞書の内容を利用して古辞書全体の集大成をすることを提言し、それは作品別のコンコードダンスとの参照をまつものであると指摘している。⁴³⁾ ともかく、辞書において語原は必要不可欠なのであって、その基礎作業としての文献別の索引、つまり文学作品などの用語索引の作成がさげばれているが、そのこととあわせて語原研究の典型として、実地踏査がいかに苦心に満ちたものであるかは、「大言海」での“本書編纂に当って”⁴⁴⁾でまのあたりに見ることができ、他の語原研究についての論文にもみられる。⁴⁵⁾ この語原探索については、“だから機会に行き遭った人が幸運に語原をつかまへるだけだ。科学的な態度で押して行った所で、必ずしも成跡を挙げるといふことにならない。ほんとうにむづかしい事だ”⁴⁶⁾と、悲観的というよりはこの分野の宿命を再確認されているような折口氏の言葉は、反面、だからこそ国文学においては用語索引がどんなに必要とされているかを卒直に示しているといえるのである。

II. 構成と特徴

国文学の用語索引にどのようなものがあるかをみる前に、従来から索引として扱われてはいるが、用語索引でないものについてふれておきたい。

- a. 国歌大観索引部 (松下大三郎, 渡辺文雄編・中文館書店, 昭和 6)

- b. 続国歌大観索引部 (松下大三郎編・中文館書店, 昭和 6)

「国歌大観」は本歌の一部分(五句のうちのどれか)を知っている場合その全体をつかみ, 作者・詞書・出典などを求めることができるもので, その実際の使用については「例言六 今索引法を例示すること下の如し」に明瞭である。「続国歌大観」は, 見出し語が第一句と第四句に限定されているので, 他の箇所からはひけなくなっている。

- c. 日本随筆索引 (太田為三郎編・岩波書店, 大正15)
- d. 続日本随筆索引 (太田為三郎編・岩波書店, 昭和 7)

近世の随筆類のどんな書に, いかなる内容が記されているかを検索できるもので, その所在の巻数, 丁数をも示している, 二書のいずれからも“和泉式部”の最初の項をひいてみると,

和泉式部 といふ名 (孝経三ノ四)

続 和泉式部 には人がらに適はぬ歌多し
(河社九九二)

とあって, この(孝経)(河社)をそれぞれの収録書目で探せば, 書名・著者名・巻数・発行年代がわかるのである。

- e. 日本説話文学索引 (平林治徳, 石山徹郎, 境田四郎編・日本出版社, 昭和18)

これは説話の内容を摘出したもので, その書名・巻次・所収本の頁数を示していて, 再び“和泉式部”の項の冒頭をみると,

和泉式部 賀茂神主ただよりと連歌す
(俊秘下・八一)

とあって, 凡例の目録をたどることによって必要事項に到達できるのである。

- f. 三句索引俳句大観 (佐々政一編・明治書院, 大正 5)

“本書は明治以前の最も著名なる 俳句を五十音順に配列し, 古句の作者・出典等を検索するの用に供し, 兼ねて俳人が句作の参考として, 容易く類句を見出すに便ならしめんとし編纂したるものなり”(p. 1) 収録句数一万二千余で, 五七五のいずれの部分からもひける。

- g. 近世俳句大索引 (安藤英方編・明治書院, 昭和34)

“本書は明治以前の俳句およそ六万を, その初句もしくは第六字以下を含めて, 五十音順に配列したもので, 初句だけによって, その句の全形と, あ

わせて作者・出典・季別などを知ることができ, さらに類句をたずねる便をも兼ねそなえている”(p. 1)

これらのうちで「日本随筆索引」と「日本説話文学索引」が用語索引として上げられていることが見出される。⁴⁷⁾ 確かに形式の上ではコンコーダンスとしての要素を備えているとはいえ, これは用語索引とはいえない。コンコーダンスが内容によって, 語(用語)索引(verbal index)と事実(項目)の索引(real index)に分けられるというのが, いつのまにか混同されてしまったものと考えられる。ここではその本来の姿に戻すために, 用語索引と内容索引とを区別し, 内容索引としては和歌索引(たとえば先にあげた a. b.) 説話, 随筆索引(c. d. e) 俳句索引(f. g.)などを設けるべきで, この他のものとして伝記索引などが考えられる。これらはともにそれなりに重宝な道具である。

次に用語索引をみでみることにする。はじめから用語索引の対象を物語, 日記に限定してきたので, 仮名の発生につながっている万葉集をのぞいては, 漢字のものはすべてとらないことにした。以下のものは, 東京大学総合図書館, 国立国会図書館, 都立日比谷図書館にて管見したものを主とし, 実物のみられなかったものについては, 「日本の参考図書」「国文学便覧」「国文学研究書目解題」によった。順序は発行された年代順とし, 索引の内容を列挙した。

1. 万葉集総索引単語篇・正宗敦夫編, 白水社, 昭和 6.

1 冊, 27 cm.

序	山田孝雄	1-3
序	橋本進吉	1-3
凡例		1-9
単語篇		1-1337

- 1'. 万葉集総索引漢字篇丁数篇諸訓説篇, 正示敦夫編, 白水社, 昭和 6. 1 冊. 27 cm.

漢字篇		
漢字篇凡例		1-2
漢字篇		1-255
丁数篇		
丁数篇凡例		1-2
丁数篇		1-68
諸訓説篇		
諸訓説篇凡例		1-4
記訓説篇		1-273
万葉集総索引編纂事情		1-4

国文学における用語索引のありかた

- | | | | |
|---|--------------------|---|---------|
| 万葉集総索引本文篇正誤 | 1-3 | 八 形容詞, 副詞 | 84-下 |
| 万葉集総索引単語篇正誤 | 1-5 | 九 接続詞 | 99-中 |
| 「本文篇」頭註諸本の栞 | 1-16 | 一〇 助詞 | 99-下 |
| 校異を出さざる異体字ならびに通用字の表 | 1-8 | 一一 感動詞 | 100-下 |
| 2. 平家物語・山田孝雄・宝文館, 昭和 8. 1 冊. | | 一二 接尾語 | 101-上 |
| 3. 文献索引・アチック ミュージアム, 昭和11. 1 冊, 27 cm. | | 一三 番外 | 101-中 |
| 日本古典索引 | | 附録 異版徒然草文段対照表 | |
| 索引東海道膝栗毛 岩波文庫 345-347 | 1-34 | 例言 | 105-111 |
| 索引浮世風呂 岩波文庫 340-341 | 1-24 | 〔表〕 | 112-127 |
| 索引世間胸算用 岩波文庫 232 | 1-8 | 5. 新訂芭蕉俳句集 (岩波文庫) 索引・額原退蔵編・岩波書店, 昭和15. 1 冊. | |
| 索引たけくらべ 岩波文庫 32 | 1-4 | 6. 土佐日記・山田孝雄・宝文館, 昭和18. 1 冊, 21 cm. | |
| 索引一茶俳句集 岩波文庫 1091 | 1-15 | 序 山田孝雄 | 1 |
| 4. 徒然草分類索引 附・異版徒然草文段対照表・黒田亮撰・岩波書店, 昭和11. 127 p., 23 cm. | | 例言 | 1-2 |
| 序 黒田亮 | 1-4 | 紀貫之伝 (大日本史歌人伝) | 1-2 |
| 凡例 | 5-8 | 土佐日記諸本解説 | 1-40 |
| 目次 | 9-11 | 目次 | 1-4 |
| 第一部文段索引 | 1-上 ⁴⁸⁾ | 本文 | 1-43 |
| 第二部事類索引 | 4-上 | 索引 | 1-28 |
| 一 天文地文 | 4-上 | 和歌索引 | 1-3 |
| 二 動物 | 6-中 | 7. 方丈記・山田孝雄・宝文館, 昭和18. 1 冊. | |
| 三 植物 | 7-中 | 8. つれづれ草・山田孝雄・宝文館, 昭和18.1 冊, 21 cm. | |
| 四 人名 | 9-中 | 序 山田孝雄 | 1 |
| 五 地名国名 | 12-上 | 例言 | 1-2 |
| 六 年号 | 13-中 | 卜部兼好伝 | 1-2 |
| 七 書名 | 13-中 | 徒然草諸本解説 | 1-53 |
| 八 社寺建造物 | 14-上 | 目次 | 1-17 |
| 九 神道 | 14-下 | 本文 | 1-178 |
| 一〇 公家 | 15-上 | 索引 | |
| 一一 武家 | 17-上 | 一 地名 | 1-上 |
| 一二 寂家 | 17-中 | 二 人名 | 3-中 |
| 一三 陰陽家 | 19-下 | 三 書名 | 6-下 |
| 一四 住居調度服飾 | 19-下 | 四 年号 | 7-上 |
| 一五 音楽 | 21-下 | 五 一般索引 | 7 中-165 |
| 第三部語法索引 | 22-中 | 9. 総索引付打聞集索引・説話集研究会・高羽五郎・昭和27. | |
| 一 有形名詞第一類 | 22-中 | 10. 源氏物語用語索引上・吉沢義則, 木之下正雄著・平凡社, 昭和27. 368 p., 22 cm. | |
| 二 有形名詞第二類 | 31-上 | 凡例 | 1-8 |
| 三 無形名詞第一類 | 36-中 | 対校源氏物語新釈用語索引 上〔あーち〕 | 1-368 |
| 四 無形名詞第二類 | 42-中 | 10'. 源氏物語用語索引下・吉沢義則, 木之下正雄著・平凡社, 昭和27. 358 p., 22 cm. | |
| 五 代名詞 | 46-下 | 対校源氏物語新釈用語索引 下〔つーを〕 | 1-354 |
| 六 動詞第一類 | 47-中 | | |
| 七 動詞第二類 | 67-下 | | |

- | | | | |
|---|---------|--|---------|
| 河内本採用表 | 355-358 | 本文索引篇 | |
| 11. 源氏物語大成卷四 索引篇. 池田亀鑑. 中央公論社,
昭和28. 688 p., 27 cm. | | 凡例 石井文夫 | 5-12 |
| 凡例 | 1-29 | 目次 | 13 |
| 索引篇 一般語彙 | 1-688 | 本文索引篇 | 15-194 |
| 11'. 源氏物語大成卷五 索引篇. 池田亀鑑. 中央公論社,
昭和31. 569 p., 27 cm. | | 諸説篇 | |
| 凡例 | 1-21 | 凡例 青島徹 | 197-198 |
| 目次 | 1-7 | 諸説篇項目表 | 199-204 |
| 索引篇 助詞・助動詞 | 1-569 | 諸説篇 | 205-343 |
| 11''. 源氏物語大成卷六 索引篇. 池田亀鑑. 中央公論社,
昭和31. 219 p., 27 cm. | | 諸説索引篇 | |
| 凡例 | 1-4 | 凡例 石井文夫 | 347 |
| 目次 | 1-8 | 諸説索引篇 | 349-353 |
| 索引篇 項目一覧 | | 岩波文庫本・群書類従本対校表 | |
| 一般語彙 | 1-85 | 凡例 栗山術子 | 357-358 |
| 助詞・助動詞 | 87-205 | 〔対校表〕 | 359-368 |
| 接尾語 | 207-219 | 群書類従本異同索引 | |
| 12. 讃岐典侍日記索引. 馬淵一夫編. 著者発行, 昭和
29, 58 p. | | 凡例 石井文夫 | 371 |
| 13. 徒然草総索引. 時枝誠記編. 至文堂, 昭和30. 541 p.,
22 cm. (協力者 青木伶子・加藤一郎・鈴木雅子・松
井栄一・板坂美智子・鈴木一彦・西尾寅弥) | | 〔異同索引〕 | |
| はしがき 時枝誠記 | 1 | 16. 芭蕉七部集総索引. 山本唯一編. 法蔵館, 昭和32.
487 p., 22 cm. | |
| 凡例 | 1 | 凡例 | 1-2 |
| 目次 | 2-5 | 目次 | 3 |
| 本文 | 13-154 | 本文 | 1-110 |
| 索引篇 | 157-541 | 索引篇 | |
| 14. 御物本更級日記総索引. 東節夫, 塚原鉄雄, 前田欣
吾編. 武蔵野書院, 昭和31. 80, 94 p., 22 cm. | | 用語索引 | 1-443 |
| ——本文篇—— | | 作者別初句索引 | 444-481 |
| 凡例 | 1 | 〔附〕作者別割引索引 | 482-484 |
| 更級日記 | 1-80 | 肩書索引 | 482-487 |
| ——索引篇—— | | 17. 竹取物語総索引. 山田忠雄編. 武蔵野書院, 昭和33.
446 p., 22 cm. | |
| 凡例 | 3-4 | 序 山田忠雄 | 1-4 |
| 索引篇 | 5-94 | 目次 | 5 |
| 15. 紫式部日記用語索引. 佐伯梅友監修. 東京教育大学
中古文学研究会編. 日本学術振興会, 昭和31. 390 p.,
22 cm. | | 総索引凡例 | 7-8 |
| 序 佐伯梅友 | 1-3 | 本文 (古活字版十行本) 第一丁オ一第五十二丁オ
総索引 | |
| まえがき | 4 | 第一部 〔ニ体言, 用言, 副詞, 接続詞等〕 | |
| 目次 | 5 | 凡例 | 118 |
| 岩波文庫本用語索引 | | 索引 | 119-237 |
| | | おぼえがき (一) | 328 |
| | | 第二部 〔ニ助詞・助動詞〕 | |
| | | 凡例 | 330 |
| | | 索引 | 331-443 |
| | | おぼえがき (二) | 444 |
| | | あとがき | 445-446 |

国文学における用語索引のありかた

18. 古今集総索引・西下経一, 滝沢貞夫編・明治書院, 昭和33. 246 p., 22 cm.
はじめに〔西下経一〕 1-2
目次 3
凡例 4-6
仮名序 (本文) 1-13
異本の歌 15-18
仮名序索引 19-46
歌語索引 47-179
詞書左注索引 181-235
古今集書目 236-238
人名索引 239-245
後記 滝沢貞夫 246
19. 和泉式部日記総索引・東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編・武蔵野書院, 78, 84 p.
——本文篇——
和泉式部日記総索引本文篇凡例 1
本文篇 1-78
——索引篇——
凡例 3-4
索引篇 5-80
掛詞一覧 80-82
日記歌索引 82-84
20. 和泉式部日記総索引 (吉田幸一「和泉式部全集本文篇」所収・古典文庫, 昭和34. 1 冊, 22 cm) 文章語研究会編 (編者 青木伶子, 鈴木一彦, 鈴木雅子, 竹内美智子, 松井栄一)
和泉式部日記総索引
凡例 4-7
第一部 〔「本文の主底本である寛元四年奥書本の語彙の索引」〕 9-158
和泉式部日記異文索引
第二部 159-186
21. 紫式部日記索引 (池田亀鑑著「紫式部日記」所収・至文堂, 昭和36. 634 p., 22 cm)
紫式部日記索引⁴⁸⁾ 515
一般語彙索引凡例 517-520
一般語彙索引 521-589
助詞・助動詞索引 590-595
〔誤〕
動詞・助動詞索引 596-631
22. 伊勢物語索引 (大津有一編「伊勢物語に就きての研究〈補遺篇〉〈索引篇〉〈図録篇〉」所収・有精堂, 昭和36. 706 p., 22 cm) 伴久美担当
伊勢物語索引
第一部 語彙索引
凡例 412
語彙索引 413-570
第二部 助詞・助動詞索引
凡例 572
助詞・助動詞索引 572-684
23. 奥の細道総索引・井本農一, 原田秀人著・明治書院, 昭和37. 22 cm.
序 井本農一
凡例 1
本文 2-3
索引 1-181
あとがき 原田秀人 183-184
24. かげろふ日記総索引・佐伯梅友, 伊牟田経久編・風間書房, 昭和28. 22 cm.
序 佐伯梅友 1-2
目次 1
凡例 1-6
本文篇
凡例 8
本文 9-252
索引篇
第一部 (一般語彙索引)
凡例 254
一般語彙索引 255-436
第二部 (助詞・助動詞索引)
凡例 438
助詞助動詞索引 439-803
あとがき 伊牟田経久 804-805
25. 浜松中納言物語総索引・池田利夫編・武蔵野書院, 昭和39. 300 p., 22 cm.
序 久松潜一 1-2
序 松尾聡 3-4
目次 5
凡例 7-12
本文補正表 13-22
総索引 1-238
本文異同対校表
凡例 240
対校表 241-258
本文異同索引

凡例	260
索引	261-278
日本古典文学大系本との頁行数対照表	
凡例	280
対照表	281-297
あとがき	299-300
26. 広本略本方丈記索引・青木伶子編・武蔵野書院, 昭和40. 515 p., 22 cm.	
序 時枝誠記	1
序 岩淵悦太郎	1-2
まへがき	1-4
目次	1
広本篇	
本文の部	5-24
諸本解説	2-24
凡例	25-33
本文	35-211
索引の部	
総索引 凡例	217-221
索引	223-296
語彙索引 凡例	299
索引	301-315
異文索引 凡例	319-321
索引	323-353
略本篇	
本文の部	
諸本解説	359-360
凡例	361-362
本文	363-387
索引の部	
凡例	391-392
総索引	393-415
追記・竹取物語索引・塚原鉄雄編・三色菫の会, 昭和28. 謄写版.	

以上のものを索引構成のうえからみていくと, (1) 見出し語のもとに, 見出し語をふくむ用例をもち, その引用箇所を明らかにしているもの——万葉集総索引単語篇, 芭蕉七部集総索引, 竹取物語総索引, 伊勢物語索引 (2) 用例が全ての見出し語にわたって出されているのではなくて, 助詞・助動詞などにみられるもの——徒然草総索引, 和泉式部日記総索引 (書誌 No. 20) 奥の細道総索引, かげろふ日記総索引, 方丈記総索引 (3) 見出し語

のもとに, その語の引用箇所だけをあげているもの——その他の索引。また, 事項すなわち一般語彙と助詞・助動詞を分けて立てて索引を構成しているものには, 源氏物語大成索引篇, 竹取物語総索引, 紫式部日記索引, 伊勢物語索引, かげろふ日記総索引がある。

最近になってようやく索引の“より有効に活用できるための技術が問題となる”⁵⁰⁾ 技術の論や, 要語索引法 (Concordancing) というような言葉が散見されて関心をもたれるようになってきた。しかし索引作成の現場はまだまったくの手作業であって, それも各人の創意工夫, 学問への情熱と誠意, 努力によってのみ成り立っているありさまなので, “索引は全く学問的奉仕作業であって, 恵まれない仕事であるが, 高く評価されるべきものと思ふ”⁵¹⁾ ということになる。このことからしても, 用語索引の標準的なありかたの追求から, 望ましい形態を究めていくことは, まさに時代的な要請であるといえよう。

A. 構成

そもそも目録とか索引は, はじめに対象となるものが存在していて, 後になって要求され作られてきたものであるから, 索引の評価も実際に使用してみた上でなくてはくだせないことになる。そしてその真価も索引対象そのものを離れては意味がなくなってしまう。その対象と索引との関連性は, 先の構成上の分類によって (1) に属するものは, 用例付きであるから, たとえ索引のみで本文が手許になくてもまだなにがしかの手掛りを提供してくれるが, これが, (3) のものとなると, ただ見出し語とその引用箇所の指摘だけなので, もしも本文がないとなると, とても索引本来の機能を生かした使いかたはむづかしくなることが必定である。次に用語索引の機能についてみておきたい。

〔本文 I〕 箆毛与美箆母乳布久思毛与美夫君志持此岳爾…… (万葉集・巻一)

コ〔箆〕	ミ
ミ	ミ
美箆	箆毛与一母乳 [一] 7 オ
毛与	箆一美箆母乳布久思一美夫君志持 [一] 7 オ
母乳	箆毛与美箆一布久思毛与美夫君志持 [一] 7 オ
布久思	一毛与美夫君志持此岳爾葉採須兒 [一] 7 オ
持	美夫君志一此岳爾葉採須兒 [一] 7 オ
此	一岳爾葉採須兒 [一] 7 オ
岳	此一爾葉採須兒 [一] 7 オ
爾	此岳一葉採須兒 [一] 7 オ

(万葉集総索引単語篇)

〔本文 Ⅱ〕いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給
けるなかに（源氏・桐壺）

いつれ【何】（代）桐壺 五 ①

とき【時】

御とき 桐壺 五 ①

にようごかうい【女御更衣】（名）桐壺 五 ①

あまた【数多】（副）桐壺 五 ①

さぶらふ【侍】（動四）

さぶらひ〔連用〕桐壺 五 ①

たまふ【賜・給】（動・補助四）

たまひ〔連用〕桐壺 五 ①

なか【中】（名）桐壺 五 ①

——以上 一般語彙

の【代名詞接続】

（いつれ）の 連体修飾 桐壺 五 ①

にか【名詞接続】結び省略 桐壺 五 ①

（たまひ）ける 連体修飾 桐壺 五 ①

に【名詞接続】桐壺 五 ①

——以上助詞・助動詞

（源氏物語大成索引篇）

〔本文 Ⅲ〕いまはむかしたけとりの翁といふもの有りけり
（竹取）

いま（今）

いまはむかしたけとりの翁といふもの有りけり 一オ

むかし（昔）

いまはむかしたけとりの翁といふもの有りけり 一オ

たけとりのおきな（竹取の翁）〔人名〕

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

おきな（翁）

たけとりの翁 一オ

い・ふ（言）㊦

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

もの（物）

〔人間ヲ 意味スル 例〕

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

あ・り（有）㊦

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

——以上 第一部

は（係助詞）

〔体言ヲ ウケル モノ＝主格・提示格・副詞格ヲ フ
クム〕

いまはむかし 一オ

の（格助詞）

〔人名ニ ツカハレル モノ〕

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

と（格助詞）

〔名目ヲ シメス モノ〕

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

けり（助動詞）㊦

〔用言ヲウケルモノ〕

たけとりの翁といふもの有りけり 一オ

——以上 第二部

（竹取物語総索引）

1. 総合的要因

a) 底本

索引における底本の位置は、その選定を誤るならば、索引ばかりいくらく作ったところで、骨折り損で終るのがおちである。ことに国文学関係のものは一字もおろそかにできないし、索引の特色として一字ももらさずにとることが指摘されるのに、異本が多くて原文が混乱したままとするのは皮肉というよりほかない。底本をめぐっての索引のありかたとしては (1) 選定された底本にもとづく索引——徒然草総索引、竹取物語総索引など (2) 二本以上の底本による索引——和泉式部日記総索引(No. 20) 方丈記総索引など (3) 自ら整えた底本の索引——源氏物語大成索引篇、かげろふ日記総索引などがあるが、索引本来の姿はむしろ原文についてのものでなければならぬ。用語索引はそれほどまでに本文と密接不可分の関係にあるわけで、英文学の作品に関しては、その例が見当たらないが、対象となる作品の大きさ、量によっても左右されるものの、国文学の特殊性からいえば、本文と索引は一冊となっている方が利用者にとっては便利であるし安心できるであろう。

b) 配列

国文学の用語索引は、本文の全語彙につきどこからでも探せるようになっている。その配列は、歴史的仮名遣いで五十音順による方法をほぼ原則としている。漢字があるときは機械的に五十音順かあるいはABC順に配列するか、または頭字によってそろえるかで方針は分れてくるが、⁵²⁾ これと似たような問題に用言の扱い方がある。たとえば“あいなし”という形容詞の場合など

あいなし、——ウ ——キ ——ク ——ケレ ——シ

（源氏物語用語索引）

のように、見出し語を終止形で掲げてそのあとは活用形にしたがって、この場合は活用形をさらに五十音順と

第2表 国文学用語索引一覧表

(昭和20年以後)

No.		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	追記	
項目		用 語 索 引 名	源氏物語用語索引	源氏物語大成 索引篇	讃岐典侍日記索引	徒然草総索引	御物本更級日記 総索引	紫式部日記 用語索引	芭蕉七部集総索引	竹取物語総索引	古今集総索引	和泉式部日記 総索引	和泉式部日記 総索引	紫式部日記索引	伊勢物語索引	奥の細道総索引	かげろふ日記 総索引	浜松中納言物語 総索引	広本方丈記総索引	略本方丈記総索引	竹取物語索引
(冊数)			2	3									*	*	*						
刊年月		27・	27・10・27・11	28・8・31・9	29・1	30・8	31・4	31・5	32・3	33・6	33・9	34・5	34・9	36・11	36・12	37・9	38・2	39・6	40・10	28・9	
底本			対校新釈 源氏物語	校異篇本文		十行古活字本	帝室御物 藤原定家筆	岩波文庫本	初版本	古活字版十行本	朝日古典全書	三条西家本	和泉式部 日記校本第一	校異篇本文	伊勢物語校本	素電清書本	桂宮本を校訂	新註国文学叢書	略本〔略〕 広本〔大福光寺本〕	沢瀉久孝編 新註古典選書本	
本文用例			√	√		○	○	√	○	○	√	○	○	○	√	○	○	○	○		
分立			√	○		√	√	√	√	○	√	√	√	○	○	√	○	√	√		
見出し語			√	A		C	B	C	C	C	B	B	C	A	A	D	A	C	A		
配列	同形用言		体用自立 言言語	◎		√	名代感 詞詞詞	体用自立 言言語	√	√	体用自立 言言語	名代感 詞詞詞	√	√	√	√	体用自立 言言語	√	√		
	活用品詞		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
文法的機能	活用		√	動ノミ		√	△	√	√	○	√	△	√	○	○	○	√	√	○		
	品詞		△	○		√	△	△	√	◎	△	△	△	○	○	○	△	△	√		
引用箇所	巻		①桐	桐壺																	
	段					58									二六						
	頁		一	一		四	16	二				35	八	二二	四	二七	87	96			
	行		①	⑤		⑩	1	①					8	7	③	①	三	④	⑭	元	
おさめかた	その他								五六 四ウ	二											
	大きさ		22	27		22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	
編纂経過	段		3	4		3	横2	2	5	2	2	横2	3	3	3	3	3	横2	3		
	行		31	38		24	40	24	24	24	20	40	23	32	29	30	24	38	24		
備考			√	√		√	√	√	√	○	○	√	√	√	√	○	○	○	○		
備考				卷一見 四七頁 凡例						二見 八頁ヲ											

注1. (冊数)の*印は索引が所収されていることをしめしている。

注2. 記号説明 ○(YES) √(NO) △(必要に応じて) ×(一部にとる) ◎ (備考を参照せよ)

注3. " A(ゴチック) B(段落あり) C(ゴチックで段落あり) D(その他)

注4. 表示基準 ① 用言は終止形にまとめているか ② 活用形の指示はあるか ③ 同形のものの配列順はどうか。

注5. 引用個所の例はアトナダムにひいた。

しているのだが、行を変えないでまとめているのと

あいなし〔形〕

あいな〔語幹〕

あいなく〔連用〕

あいなう〔音便〕

あいなし〔終止〕

あいなき〔連体〕

あいなけれ〔已然〕(源氏物語大成索引篇)

のごとく、各活用ごとに行を改めてとっているものがある。第2表からもわかるように、いずれの形にしても用言の終止形を見出し語にとってそのもとに各活用形を出しているものが大部分であるが、それと対応してちがった方式をとっているものに「竹取物語総索引」と「奥の細道総索引」とがある。これは動詞、形容詞、助動詞の各活用形をそのまま見出しとする点で各活用形が分散することになるが、利用にあたってはそれが利点となってストレートで探す語に到達できる。索引の量が庞大となると、ワンステップふむものは、たとえば源氏物語などどちらを使ってみても、見出し語のもとから各活用形をたどり目指す引用個所に達するのは決して容易なことではない。それは用言の全体に対して言えることである。

また同音(たとえば“き”という名詞、木、黄、季、着など)のものや同形(“き”という活用形、動詞“来”連用、動詞“着”未然連用、助動詞“き”終止)のものの配列については、凡例で断っているうちの大部分のものは、体言、用言、自立語、附属語の順をとっていて、そのあとにくるものとして造語成分(古今集総索引)、接尾語(源氏物語用語索引)をとるものなどがみられる。むしろここで問題となるのは、こうした同音、同形のものの語の区分を示すには、漢字、品詞、活用形などの記入が必須であって、このことは訓みや意味が決らないことには配列できないばかりか、ひいては索引としてまとまらないということにもなるのである。

c) 一般語彙と助詞、助動詞の分立

この形式を採用した最初の索引は「源氏物語大成索引篇」であり、現在までに「竹取物語総索引」「紫式部日記索引」「伊勢物語索引」「かげろふ日記総索引」を数えることができる。この分立方式については、池田亀鑑氏は“助詞・助動詞は、同一語彙のあらはれる度数が多く、他の一般語彙とともに編纂することは、索引使用に不便を来すおそれがあるので、これは別に扱ふべきものと思はれる”⁵⁵⁾としており、山田忠雄氏も“文法上という詞と辞とは語性の転換によって相互に交流することもある

が、大体は対立的な性格を持つから、部立は二別し、例えば第一部——体言、用言、副詞、連体詞、接続詞、感動詞、——第二部助辞とすることが望ましい。その際、第一部には第二部の項目ぐらいいは保存し、相互参照せしめることが理想的である”⁵⁶⁾とその構成方針を述べており、また「竹取物語総索引」のあとがきでもこの分立を第一の特徴として、助辞と詞との区分が強調されている。

d) おさめかた

具体的には段・行および字数、活字の大きさ、符号の使い方、見出し語の出し方などであるが、この中には索引の形態として横組みか縦組みか、また用例をとるかとならないかなどもふくまれてくる。見易さという点では「源氏物語大成索引篇」が第一で、それは第一に活字が大きいこと、第二に枠が設けてあって位置が定まっていること、第三に適度にあきがあって余裕がみられること、などがその主なる理由である。用例をとったものでは「竹取物語総索引」があげられる。これは縦二段組みで、見出し語がゴシックでかつ用例とは一字分段落がついているためと、用例の適度な長さが指摘される。一方、「源氏物語用語索引」は詰めすぎていて、「奥の細道総索引」は逆に間があきすぎて、というのは活字がまばらという感じでどちらも見にくい。国文学の用語索引は用例をとっているのが少いのであって、その根拠を結局は原文を見るようになるから全く不必要だとするのならば、“索引に文例は不必要だということもしばしばきくが、基本語、頻出語、助辞においてまったく用例を附さないとは結局所出の順にならべるよりしかたがないし、こうすればかえっておほくなるにしたがって検出にてまどり、かえって本来の用をはたさないことがある”⁵⁵⁾ばかりでなく、索引のみでは具体的用例を知りえないという不便もあるわけで、索引の使命からいうなら用語索引というからには、用例をとまわらないものはこの索引の精神に反すると思われる。ただ“勿論、総索引が、すべての語について、それぞれ前後の引例をなすならば、あらゆる点に於て理想的であり、この問題(筆者注・索引自体に漢字のもの、仮名のものという区別が示されていたならばという希い)も解消する。そのようなものとして既に「竹取物語総索引」が存在する。しかし若しも源氏物語、宇津保物語等の如き、量的に龐大な作品に於てこの理想を通そうとした場合、果して刊行という事が可能であるか否かを考える時、常識的には悲観的にならざるを得ない。従って現実には、ほぼ従来通りの、即ち普通の語に

対しては用例のない総索引の類が、今後とも続々と世に出るに違いない⁵⁶⁾との意見もみられて、用語索引とも出版物であってそのことは過去における「国歌大観」や「万葉集総索引」の世に出るまでのいきさつ、池田亀鑑氏の指摘⁵⁷⁾などから、現在でも大きなネックとなっていることが十分に予想されるのである。

用例のおさめかたで引用個所の指示を先に出す様式(J. Strong の Bible concordance 参照)は、国文学のものにもみられ、それらは「徒然草総索引」(助詞、助動詞に)「和泉式部日記総索引(No. 20)」(助詞、助動詞その他必要と認められる語)「伊勢物語索引」(全体にわたって段・行数のみを用例の文頭に附している)「かげろふ日記総索引」(助詞・助動詞)であるが、これとても用例の配列順序が本文にしたがうから合理的たりうるのであって、「竹取物語総索引」のように“文例の排列は、みだし語の質性に依じて、あるいは、うけることばの、あるいはつづくことばによって五十音順にならべたが、みぎふたつのばあいを通じて単純語から複合語へ、助動の使用なきものから助辞を有するものへということを原則としたつもりである⁵⁸⁾”となると、また扱い方が変わってくるのは当然であろう。

e) 装丁など

大きさと厚さのつりあいは索引の容易さ、使いやすさにつながり、紙質、装丁のよしあしは使用上の寿命に影響してくる。編者および出版社、印刷者は一体となって徹底的に誤りを正し、校正の厳正を期してこそ信頼をもって使用されるのであって、このことなくしては索引はあってなきに等しいことになる。J. Strong は Bible concordance の制作にあたり、完璧 (completeness)、簡潔 (simplicity)、正確 (accuracy) を本分とした事が記されている。⁵⁹⁾

2. 分析的要因

a) 見出し語のとりかた

基本的態度としては単語にもとづいてとることを原則とし、同時に一字ももらさない処置をほどこしている。実例は先にひいたとおりである。

b) 品詞の記入

見出し語のもとにその語の品詞名を記していない例として、「徒然草総索引」「芭蕉七部集総索引」「方丈記総索引」がある。その理由は“品詞の帰属には諸説があるため”(徒然草総索引)で、その他のものには明記されていない。

c) 文法事項の指示

前項の品詞の記入とこの文法事項の指示を合せて、これに接続のしかたも加えて一貫した方法を徹底しているのは「源氏物語大成索引篇」「紫式部日記索引」である。活用形記入の有無は第2表のとおりである。助詞の例として、“に”をみてみると次のようになっている。

1) 万葉集総索引単語篇

第1 格助詞 (ネに通ふ)

第2 其他

〔い〕 ナシを受けたるもの

〔ろ〕 形容詞の連体形を受けたるもの

〔は〕 動詞 (敬相の助動詞を含む) の連体形を受けたるもの

〔に〕 助動詞を受けたるもの

〔ほ〕 用語に続けるク、ラク (所謂延言) を受けたるもの

〔へ〕 右の以外〔名詞、形容詞、動詞、副詞等〕(注意・第2の分類方法は〔い〕より順次に抜出したれば、各条が理論上に混同する点有る場合は、其順位の前なる分に編入せりと知るべし)

2) 源氏物語大成索引篇

〔名詞接続〕

〔代名詞接続〕

〔動詞連用形接続〕

〔動詞連体形接続〕

〔形容詞語幹接続〕

〔形容詞ク活終止形接続〕

〔形容詞ク活連体形接続〕

〔形容詞シク活連体形接続〕

〔形容動詞連体形 はなやかなる……接続〕

〔副詞接続〕

複合項目一覧 かに……

に (副詞構成)

(あてあて) に

(いかう) に

(いま) に

3. 徒然草総索引

I 体言十に

1. 名詞十に

2. 複合シタ形ノママ用ヒラレルコト多キモノ

II 用言 (連体形) 十に

1. 動詞十に

2. 形容詞十に

III 用言 (連用形) 十に

Ⅳ 用言（終止形）＋に

Ⅴ 助動詞＋に

4. 紫式部日記索引

名詞接続

代名詞接続

動詞介入

動詞連体形接続

形容詞ク活連体形接続

形容詞シク活連体形接続

形容動詞連体形接続

複合項目一覧

に（副詞構成）

5. かげろふ日記総索引

Ⅰ 体言＋に（Ⅴヲモ参照）

Ⅱ 連用形＋に

Ⅲ 連体形＋に（Ⅴヲモ参照）

Ⅳ ソノ他＋に（Ⅴヲモ参照）

Ⅴ に＋助詞（Ⅱヲモ参照）

一部の例を抽出したにすぎないが、以上のような相違が認められる。「徒然草総索引」「かげろふ日記総索引」はどちらも“に”の用例の前にローマ数字のもとの大見出しを掲げて項目内の内容が一覧でき、検索に際してはあらかじめ見当がついているので容易にひける。些細なことであるが能率の面から見ると、このような配慮がされているのとないとでは、かなりのちがいが認められる。

d) 見出し語内の配列

用言の配列（1. 構成 b) 配列 参照）は、活用の順のものと五十音順のものとがみられるが、見出し語の引用個所の配列はすべてが本文の順をとっている。用例のものについても本文の順に従って出ているのが常であって、「竹取物語総索引」は用言の配列で異っているように、用例の配列についても先に引用したように異っていて、それなりの工夫が認められるものの、慣れないと探すのに面倒である。

e) 用例のとりかた

「万葉集総索引単語篇」では特に明記していない。以下にいくつかの実例を示しておく。

“助詞、助動詞については、一例毎に別行とし、すべて前後を十分に引用し、索引のみでもその語の用法を知り得るように留意した”（徒然草総索引 凡例 索引について十）

“文例は、その語の用法がほぼわかる程度のながさで

だすことを原則とした”（竹取物語総索引 総索引凡例 三-(一)）

“助詞・助動詞その他必要と認められる語については、一例毎に別行とし、すべて前後を十分に引用し、索引のみでもその語の用法を知り得るように留意した”（No. 20）和泉式部日記総索引 凡例一四）

“利用の便をはかって、紙数のゆるす範囲でその当該語彙の前後を示し、その引用は校本の表記に従った”（伊勢物語索引 語彙索引 凡例）

“語の所在の示し方は、一般語彙索引に同じであるが、さらにその語の用法をうかがえる程度に前後をふくめた本文を引用した”（かげろふ日記総索引 第二部助詞・助動詞索引〔語の所在と引用〕）

f) 引用個所の指示

必要事項は巻、段、頁、行数などであって、「古今集総索引」と「芭蕉七部集総索引」では、それぞれ歌集、句集での一連番号を提示している。変っているのは「竹取物語総索引」であって、実例における“一オ”とあるのは、底本の古活字版十行本の第一丁表ということで、行数の指示はみられないのである。だから頁まで導かれたあとはその頁の中で該当する個所を探さなければならない。参考までに第一丁オをみると、全部で169字を数えることができる。行数はもちろん10行ある。それについては総索引凡例で“みだし語のもちめられたばしよをしめすには丁数うらおもてをもつてし、行数をくはへなかった。文例のながさと影印にみるところの行款とからすれば、かならずしも行数の指示を必要としないと思ったからである”⁶⁰⁾と述べているものの、ほかのものとは比べて指示の不完全さはまぬがられない。

B. 特徴

以上の諸点を要約してみると、およそ次のようになる。

1. 一字ももらさずに索引している。
2. 見出し語の引用個所が示されている。
3. 大体において品詞の記入がみられる。
4. 見出し語は単語を基準としている。
5. 配列は歴史的仮名遣いで五十音順によっている。
6. 用言は終止形を見出し語とし、活用形の順に配列されている。
7. 用例をとるのは未だ一般化しているとはいえない。
8. 仮名だけでは意味を判別しかねるものに対し、該当する漢字を充てている。
9. 一般語彙の助詞・助動詞の分立主義が強まってきている。

10. 用例の引用箇所を用例の文頭に出すものをみるようになってきた。
11. 用例のとりかたには規準がなく、いずれもわかる程度のものである。
12. 索引のほとんどがたて組みで、大きさは 22 cm が多い。
13. 引用箇所の指示に頁は漢字、行にはアラビア数字を用いた組み合わせのものが多い。

III. 問 題 点

英文学の concordance と比較して国文学の用語索引についていえることは、用例の欠如が目立って多いことで、この本邦の用語索引の形態は、むしろ出版事情もあるものの個人の覚書的な域を脱していない点も見られ、松井簡治氏⁶¹⁾ 武田祐吉氏⁶²⁾ の述べている潜在的な索引の制作と自己の参考にするためという目的は、このことについての一つの証左といえる。索引公表の形式としては制作の目的の違いで異なるとして (1) 制作者自身のためのもの (2) 本文の理解のため (3) 記述的辞書作製の基礎資料とするため (4) 作成過程に教育的意義を認めるため (5) 現在および将来において誰かが何時か益を蒙るように、⁶³⁾ が挙げられているが、今後の重点はますます (5) の方に強まってくるものと察せられる。要するに成書として出版されるということがすでにそうした意図にもとづいているからである。この用語索引が本邦で発達しない要因として“索引が白眼視せられ且公刊されなかった事、又一方我が国語及び国字が索引に適しない事が、索引の発達しなかった重大なる素因である”⁶⁴⁾ との指摘がみられる。索引作成についての世間一般の認識と評価は、「万葉集総索引」と取り組んだ正宗敦夫氏の言葉からうかがえるし、⁶⁵⁾ 山田孝雄氏もその完成までの苦心を丹念に紹介されている。⁶⁶⁾ こうした本邦の事情の中でもって、“各人が筐底にひめる索引は 元来帳中香であるから自己の便宜のためになりさへすればよい。しかし公刊される索引は読者を予想するという意味ではすでに公器である。索引をつくるものは辞書纂家とおなじく独自のもしくは一貫した文法観をもつ必要があること勿論であるが、公器をよに発表するにあたってはおのづからそれだけの用意がなければならぬ”⁶⁷⁾ という山田孝雄氏の主張は、用語索引の今後のあるべき姿を描いてまさに卓見である。公器という自覚に立ってこそ万人の使用に耐え得るのであって、ここに索引がツールとして広く使われるのである。なお、この公器という表現は、“索引は

公器であるから、徹頭徹尾客観的で、無色透明でなければならぬ。この鉄則は厳守されるべきである、⁶⁸⁾ とすでに昭和26年に発表されている。出版物としての用語索引の出来具合に影響を及ぼす要因としては、辞書などの場合と同様に編纂事情の規模と出版事情の二点をあげることができる。辞書の場合にはこのほかに利用者側の趣好、傾向があげられており、用語索引にとっても現状を顧みるとき、もっと利用者の立場が考慮されるべきではないかと痛感される。

最も核心的な問題は、漢字混りの平仮名文にある。それは見出し語が平仮名だけでは意味が明確になりにくいこと、漢字の読み方に規準がないこと、そしてこれは表現とも関連してくるが用例に引用すべき文の長さが様々であることなどが指摘できる。語のとりかたは、複合語などはそのままとったほかに親出しと子出しというようにして全ての語についてひけるようにとの配慮工夫は、適宜に語を選択した要語索引よりは対象の範囲が明瞭になっていてすぐれている。詞と辞の分立主義も普及してきているが、「奥の細道総索引」「方丈記総索引」で見ると、特に分立形式を取らなくても両者の区分上の差異を判別できるように、見出し語の出し方、配列などに工夫をすれば、全体を辞書のように一本化しても差し支えないものと思われる。用言とても終止形のもとにまとめることなく、各活用形をそのまま見出し語とすることによってひきやすくなるのである。用例の配列は本文の順に従うのが妥当であろう。用例にとる長さは特別に長くもいらないから、特に定めないほかは現行のわかる程度という線に落つくものと思われる。

今後の用語索引の方向は、いくつかの事例の積み重ねによって自ずから明らかとなっていくであろう。中でも注目される手法は“みだし語の用法をしめすために、主として文例のをはりに 話 歌 文 のしるしをつけた。話 は会話文中の用語、歌 は和歌の用語、文 は消息の用語であることをしめす。また、詞 歌 文 とあるのは、会話文、和歌、消息を省略したことをしめす”(竹取物語総索引)と「方丈記総索引」にみられるこれまでにないユニークで斬新的な方法である。つまり、“本書は広本略本それぞれの本文と総索引及び広本のみの漢字索引と異文索引とから成るが、前述の如く総索引が眼目なのであって本文は従に過ぎない”(まへがき)とはいうものの、広本篇での本文は主底本に大福光寺本をとり、その右に古本系十本、左に流布本系六本をとって全文にわたって校合している。そしてたとえば索引で任意

にひいてみると、

アイ・ス 愛

一セ *二九〇

一ス *三一二

一スル 三二一 (総索引)

愛 一ス 二九〇 三一二 (漢字索引)

あい・愛〔一とす〕・三一二・三二一

〔以上底本「アイス」〕 (異文索引)

このことから(総索引)の一スル 三二一は本文が仮名、(漢字索引)の一ス 二九〇、三一二は本文が漢字のものであることがわかる。さらにこのうち三一二、三二一に本文に対する異文がみえていることを指している。一方略本篇では底本に長享本(右)延徳本(中央)真字本(左)の三本をとって、略本編の索引はこの三本に用いられているすべての語を五十音順に収載して、見出し語のもとにその語を有する底本が略字によって示されている。かくまで詳細にとったのも“即ち、方丈記として語学的には如何に読むべきか、を決定し、いひ換へれば建暦二年に誌した長明の意図を能ふ限り復元し、それに従って総索引を作成したい、と考へたのである”(まへがき)とその抱負のほどがうかがえて、確かに無視できない用語索引の試案となっている。

最後に索引作成者の態度について池田亀鑑氏の意見⁶⁹⁾をみておきたい。

- (1) 索引は語を中心とするものでなければならないから、一語も沈むことなく自由かつ的確に検出されること。
- (2) 編者の主観は絶対に許されない。
- (3) 索引のための底本は、可及的に正しい本文が採用されるべきで、できるだけ後世の校訂本の類は避けられるべきである。
- (4) 助詞・助動詞に関しては、その意義および分類に諸説があり、なお今後の研究にまつべき多くの諸問題があって、編者またはある特定な文法学者の学説による組織化というようなものでないことが肝要である。
- (5) 索引は学術研究の発表機関——すなわち研究報告であってはならない。それは他の多くの研究目的に即応する純粋客観的な、地図であればよいのである。
- (6) どこまでも“研究への誠実な奉仕者”たることが、索引作製者の名誉でなければならない。

結

ここにいたって、国文学における用語索引の望ましい構成をまとめてみると、

- ① 一冊にまとまっていて、内容としては本文と索引の両方を備えている。
- ② 一字ももらさないでとる。
- ③ 一般語彙と助詞・助動詞を分立しない。
- ④ 用言は各々の活用語を見出し語にとる。
- ⑤ 配列は歴史的仮名遣いとし、五十音順によるものとする。
- ⑥ 用例は必ずとって、一例ごとに行を改め、配列は本文の順とする。
- ⑦ 助詞・助動詞は引用個所を用例の冒頭に出す。
- ⑧ 同音、同形のものの配列にあたっては、その区別に必要な漢字、活用、品詞などを補い、配列は体言、用言、自立語その他の順とする。
- ⑨ 見出し語はゴシック体とし、用例とは一字分の段落を設ける。
- ⑩ 読みの定まらないものには参照を使用する。
- ⑪ 漢字の検字表をそえる。
- ⑫ 大きさは 22 cm、たて段組みとする。
- ⑬ 引用個所の指示には、頁に漢字、行にアラビア数字を用いる。

のようになる。これは所期の目的からすると、2 年ほど前に着目した「和泉式部コンコーダンス」のための、基本的な方針決定の資料となるべきものである。実際にはまだ作業を始めていないので、むしろ実地での問題は今後に残されている。

用語索引の作成については本来古典学者または国語国文の研究者の領域なので、少くとも協力を依頼することは必要であると思われる。実際問題として索引がないというのは不便の上なく、それがひいては学問、研究の発達を妨げる原因ともなっているのがわかっているのなら、とりあげられてしかるべき性質の内容であって、決して無視してすましてはいられないはずである。だが現在までのところ、本格的に用語索引の問題は取り上げられていないというのが実状である。この論文の直接の発端となったのは、IBM の機械によって concordance がつくられているということを知ったことであった。⁷⁰⁾ それからだんだんと調べていくうちに本邦におけるコンコーダンスの未消化、用語索引の不備をみだし、小林芳規氏、池田亀鑑氏の指摘にめぐりあって、このテーマの

位置づけと責任の重大さを改めて認識させられたしだいである。英文学の分野で盛んとなってきた machine method による concordance の作成は、すでに序で述べたものが発表されており、その経過、手法、書評などいくつも文献がみられるが、ここではかえって混乱を招きそうなので努めてふれるのをさけた。国内では、水谷静夫氏の“電子計算機と古典の総索引作り”⁷¹⁾があることをつけ加えておきたい。

(東京大学工学部計数工学科図書室)

- 1) Thompson, Anthony, et al., ed. *Vocabularium bibliothecarii*, 2d ed. Paris, Unesco, 1962. p. 69.
- 2) A.L.A. glossary of library terms. Chicago, A.L.A., 1943. p. 35.
- 3) Strong, James. *The exhaustive concordance of the Bible*. London, Hodder & Stoughton, 1922.
- 4) Bartlett, John. *A new and complete concordance, or, verbal index to works, phrases, passages in the dramatic works of Shakespeare with a supplementary concordance to the poems*. London, Macmillan, 1922.
- 5) 天野敬太郎. “索引概説 上,” *図書館界*, vol. 1, no. 1, 1947. 5, p. 16.
- 6) 天野敬太郎. “内容索引と用語索引,” *日本古書通信*, 22巻, 11号, 1957. 11, p. 11.
- 7) 日本図書館協会. *図書館ハンドブック*. 東京, 1960. p. 514.
- 8) 西村捨也. “索引についての覚書,” *図書館界*, vol. 10, no. 5, 1958. 10, p. 132-3.
- 9) 福原麟太郎, 編. *文学要語辞典*. 東京, 研究社, 1960. p. 21.
- 10) 日本図書館協会. *ドキュメンテーション用語集邦訳版*. 東京, 1963. p. 26-7.
- 11) 中村初雄, 編. *図書館用語辞典*. 東京, 同学社, 1951. p. 99.
- 12) 弥吉光長. *参考図書の解題*. 東京, 理想社, 1955. p. 11.
- 13) 間宮不二雄, 編. *図書館大辞典*. 東京, ジャパン・ライブラリー・ビューロー, 1958. p. 114-5.
- 14) 加藤宗厚, 編. *正法眼蔵要語索引*, 上巻. 東京, 理想社, 1962. p. 2.
- 15) 天野敬太郎, 編. *Dictionnaire à l'usage la librairie ancienne*. 東京, 雄松堂書店, 1962. p. 34.
- 16) 情報管理便覧編集委員会. *情報管理便覧*. 東京, 日刊工業新聞社, 1963. p. 828.
- 17) 黒崎幸吉, 編. *新約聖書語句索引*. 東京, 永遠の生命社, 1952.
- 18) 聖書語句事典. 仙台, 聖書図書刊行会, 1955. p. 1.
- 19) 馬場嘉市, 監修. *聖書語句索引*. 東京, 新教出版社, 1957. p. 1.
- 20) 結城長治, 編. *口訳新約聖書語句索引*. ぶどうの木書園, 1958.
- 21) 国語学会. *国語学辞典*. 東京, 東京堂, 1955. p. 486.
- 22) 市河三喜, 編. *英語学辞典*. 東京, 研究社, 1940. p. 221.
- 23) 平凡社. *大辞典*, 11・12巻. 東京, 1953. p. 399.
- 24) 平凡社. *世界大百科辞典*, 11巻. 東京, 1956. p. 432.
- 25) 文部省. *學術用語集図書館学編*. 東京, 大日本図書, 1958.
- 26) 最新コンサイス英和辞典. 東京, 三省堂, 1960. p. 229.
- 27) Iwasaki, Tamihei and Kawamura, Jujiro, ed. *Kenkyusha's new English-Japanese dictionary*. Tokyo, Kenkyusha, 1960. p. 357.
- 28) 市河三喜, 編. *新英和小辞典*. 東京, 研究社, 1965. p. 86.
- 29) 倉石五郎, 編. *最新コンサイス独和辞典*. 東京, 三省堂, 1963. p. 500.
- 30) Katsumata, Senkichiro, ed. *Kenkyusha's new dictionary of English collocations*. Tokyo, Kenkyusha, 1958. p. 240.
- 31) 丸山順太郎, 川本茂雄, 編. *コンサイス仏和辞典*, 新版. 東京, 三省堂, 1958. p. 241.
- 32) 市河三喜, 編. *英語学辞典*. p. 303.
- 33) 桑原博史. “資料・参考文献のさがし方・用い方中古,” *解釈と鑑賞*, 昭和39年6月号, p. 117-8.
- 34) 竹内美智子. “「和泉式部日記」の語彙に関する一考察,” *国語学*, 53号, 1963. 6, p. 10-18.
- 35) 国語学会, *op. cit.*, p. 486.
- 36) 佐伯梅友, 等編. *国語学*. 東京, 三省堂, 1961. p. 238.
- 37) 松井簡治, 上田万年. *大日本国語辞典*. 東京, 富山房, 1952. p. 2, 11.
- 38) 折口信夫. *国文学概論ノート*. 東京, 中央公論社, 1960. p. 102.
- 39) *Ibid.*, p. 154-5.
- 40) 市河三喜, 編. *英語学辞典*. p. 304.
- 41) 中野好夫. *英語辞典のはなし*. <角川書店. 辞典のはなし. 東京, 1965.> p. 52.
- 42) 大槻文彦. *言海*. 東京, 林平書店. 1938. (ことばのうみの おくがき参照)
- 43) 山田俊雄. “現代国語辞典の閉塞について,” *文学*, vol. 30, no. 2, 1962. 2, p. 122-3.
- 44) 大槻文彦. *大言海*, 第1巻. 東京, 富山房, 1944.
- 45) 築島 裕. “ツンザクとヒツサクとの語源について,” *国語学*, 54号, 1963. 9, p. 1-9.
- 46) 折口, *op. cit.*, p. 155.

- 47) 「日本随筆索引」は「図書館ハンドブック」p.514に、「日本説話文学索引」は天野敬太郎“索引概説(上)”p.17にみえる。なお天野氏は同じ個所で上げた「近松語彙」(上田万年、樋口慶千代共編)を“内容索引と用語索引”の結末で“「近松語彙」を用語索引として取り扱ったのは、間違いであることを訂正して置く”(p.12)としている。
- 48) アラビア数字は頁を、漢字は該当する段を示していて、項目のはじまりをあらわしている。以下同様。
- 49) “本文総索引篇は、先生の晩年の門下生 神田直人氏および待井新一氏らを主として煩わし……”(p.633 跋より)
- 50) 小林芳規。“昭和35・36年における国語学界の展望;資料・辞書・索引,”*国語学*, 49号, 1962, 6, p.12.
- 51) 吉田幸一, 編。和泉式部全集本文篇。東京, 古典文庫, 1959, p.233 (跋)
- 52) 国語学会, *op. cit.*, p.347.
- 53) 池田亀鑑。“源氏物語総索引はいかにあるべきか,”*国語と国文学*, 329号, 1951, 9, p.4.
- 54) 国語学会, *op. cit.*, p.347.
- 55) 山田忠雄, 編。竹取物語総索引。p.445.
- 56) 青木伶子, 編。方丈記総索引。まへがき。p.1.
- 57) *Ibid.*, p.7.
- 58) 山田忠雄, *op. cit.*, p.8.
- 59) Strong, *op. cit.*, p. [iii]
- 60) 山田忠雄, *op. cit.*, p.8.
- 61) 国史辞典, 第4巻。東京, 富山房, 1943, p.365.
- 62) 武田祐吉。日本文学研究法〈日本文学大系, 第1巻。東京, 河出書房, 1938.〉p.166-7.
- 63) 小林, *op. cit.*, p.11-2.
- 64) 天野敬太郎。索引概説(上)。p.18.
- 65) 正宗敦夫。万葉集総索引編纂事情。〈万葉集総索引漢字篇丁数篇諸訓説篇。東京, 白水社, 1931.〉p.1-4.
- 66) 山田孝雄, 万葉集総索引の賛。〈万葉集大成第15巻総索引単語篇。東京, 平凡社, 1953.〉p.1-23.
- 67) 山田忠雄, *op. cit.*, p.446.
- 68) 池田, *op. cit.*, p.1.
- 69) *Ibid.*, p.1-7.
- 70) Cheney, Frances Neel. “Reference service in English and American literature,” *Library Science*, no. 3, 1965, p.45.
- 71) 水谷静夫。“電子計算機と古典の総索引作り,”*国語と国文学*, 41巻, 10号, 1964, 10, p.157-76.